

『子育てを楽しむ』特別対談

神戸大学名誉教授
中村肇先生と葛西得男理事長

コロナ禍も加わって子どもたちを取り巻く環境は厳しさを増しています。保護者にとっても子育ての不安は大きく、マザーシップ保育園にもさまざまな相談が寄せられています。そこで今回は、「あたたかい心育てる運動」の主要メンバーの一人で、「子育てを楽しむ」を呼びかけておられる神戸大学名誉教

授（小児科医学）の中村肇先生に登場していただき、葛西得男理事長とリサーチで話し合ってもらいました。（司会：本誌編集長・朝野智三）

理事 中村先生は大学を出て57年間、小児科医として研究と治療に取り組んでこられました。この半世紀で

小児医療はどう変わったのでしょうか。中村先生 今でも一番思い出深いのが、神戸大学医学部の講師だった1976年に神戸で六つ子が生まれた時のことです。この年に鹿児島で日本初の五つ子が生まれ、面白い話題として大きくニュースになりました。神戸では6人（うち1人は死産）でしたから直ち



中国・貴州で現地の子どもを診察する中村先生（2005年9月）



「安心育児」の大切さ

て生まれることも少なくなり、新生児医療前での大きな課題になっていきます。

理事長 「あなたがかい心を育てる運動」

にチームを組み、懸命に救命にあたりました。その結果、620人で生まれ、2年間は世界一の低出生体重児記録になりました。無事に育つことができ、結婚し、出産もされています。

こうしてことで代表されるように、

新生児死亡率はこの半世紀で大きく下がりましたが、今では世界に誇る低さです。現在の日本では、よほどのことがなければ救命できます。背景には医療技術の進歩がありますが、衛生、栄養など日本の環境面が大きく改善されたことでもあります。

一方で懸念されることもあります。女性の社会進出の影響もあって晩婚化が進み、結婚の高齢化が原因とみられる低出生体重児が増えているのです。出生時の体重が2500g未満の赤ちゃんは、昔は新生児の5%程度だったのが今はその倍にもなっているのです。その多くは早産児で、障害を持つ

を拝借したのです。特に、先生の育児の原点である「まなかい(眼交い)」「ダメ」は反抗心を生み出す「は今でも機会あることに使わせていただいています。」

運動にかかわるようになって、中国アメリカをはじめ世界各地で国際的な学術会議やシンポジウムが開かれるたびに参加させてもらい、各分野の世界的な学者と知り合い、大きな刺激を受けました。

運動の中で学んだことは、内藤先生の「安心育児」「ホッとする育児」の重要性です。乳幼児期の親と過ごす日々の生活の中で培われる「基本的信頼感」こそが、その後の人生を左右することになるからです。育児は単に子どもを元気に育てるものではありません。一人の人生を決定するかも知れず、ひいては社会のあり方や平和な世界がつかれるかどうかにかえりつなっていくと考えるとき、この世の最大の事業と言ってもいいのではないのでしょうか。

子育てのポイント

理事長 子どもの発達の専門家の立場から見ると、子育てで大切なことは何で

でしょうか。

中村先生 「三つ子の魂百まで」と昔から言われてきました。以前にアップリカが調べたことがあるのですが、日本だけでなく世界中に似た言葉があったのです。地域、民族、言語、宗教、文化に関係なく3歳までの育児環境の大切さは世界共通のものなのです。

生まれたばかりの赤ちゃんの脳重さは約400gです。それが生後6カ月で倍になります。3歳過ぎには3倍近くになり、急成長するのです。また脳の神経細胞のネットワークも同様、生後6カ月から3歳ごろまでに最も変化し、この時期が人格形成にとっても重要です。

でも、だからといってあまり神経質になったり、急ぐことはかえって危険です。私は常々、お母さんたちに子育て



を「ゴム風船」にたとえます。無理に「一気に膨らませよう」とすると破裂してしまいます。ゆっくりと膨らませることが、子育てでも同じなのです。私は「子どもは笑顔と涙で育つ」ともよく話します。みんなの動きについていけないかたり、輪に入っていないお子さんがいるかもしれません。そんな時に、大人は手を出さずに黙って見守るガマンが必須です。失敗することは子どもの特権だと考えてください。

内藤先生が長く名誉会長を務められた日本小児科医学会のボスターに「遊びは子どもの主食」という言葉がありました。これが私の大好きな言葉です。

ママやパパへのアドバイス

理事 長 子育てに悩む親ごさんは少なくありません。コロナ対策を含めてアドバイスをお願いします。

中村先生 新型コロナウイルスはインフルエンザと異なり、子どもは大人に比べて感染しにくく、また感染しても軽症であり、死亡例もほとんどないことがわかってきました。しかし、鼻咽喉や便にウイルスを感染期間、大量に排泄し続けるこ

ともわかってきましたので油断はできません。三密を避け、マスク、手洗いをしっかり守るようにしてあげてください。

育児については、「ほどよい子育て」でいいのです。子どもが思いこをした

大人の基準と判断しないことも大切です。子どもがウソをついたからと言って神経質にならないことです。幼児は独特の思考をするものです。うちの子は感性が豊かなんだ、夢の世界で遊んでいるんだと思い、想像力や発想力が育っている証拠ぐらいに考えてください。

今、私が一番心配していることはシンガポールの方が多くなり、大変な生活状況の中で子育てに頑張っていることです。お母さんが不安だらけたりイライラしているとそれは子どもに伝わります。負の連鎖を生みかかれません。大切なことは、悩みを一人で抱え込まないこと、ネットでの情報も役立つかも



中村 肇 (なかむら はじめ) 先生
1940年生まれ、神戸医科大学。現在の神戸大学医学部卒、医学博士。リウマチ研究センター留学。98-99年に神戸大学医学部教授、小児科学、医学部附属病院長、兵庫県立子ども病院院長、神戸大学理事、阪神4地区地域医療連携推進理事長などを歴任。現在、神戸大学の教授、にこにこハラス医療福祉センター会長。専門は小児科学、特に新生児学。

藤西 博美 (ふじにし ひろみ) 理事長
1950年大阪府生まれ、追手学院大学を卒業。米国ボストンに留学。アプリアの勤務に入社、副社長、社長を歴任。1996年から社会福祉法人秘書会理事長、国連UNEP環境計画のスペシャルアドバイザーとして子どもたちのために地球環境問題を考えるプロジェクトに参加したこともある。

中村先生の著書「子育てをもっと楽しむ」(神戸新聞総合出版センター)